

## ANTON BRUCKNER

## „Locus iste a Deo factus est“

この場所は神によって作られた

Allegro moderato



Lo - cus i - ste a De-o fac - tus est,

*Locus iste a Deo factus est,*  
この場所は神によって作られた  
*inaestimabile sacramentum,*  
それは計り知れない秘跡である  
*irreprehensibilis est.*  
非の打ちどころ(間違いが)ない

Bruckner がオーストリア郊外、リンツの教会 (Votifkapelle) の新しい聖堂の献堂式の為に作曲した。簡素で慎ましい曲であるが、ハーモニーの豊かな響き合いの中に胸を打つ瞬間がある。特に神の奇跡は「非の打ちどころ(間違いが)ない」„irreprehensibilis“ という言葉に付けられた、半音階的ハーモニーの推移は見事である。無意識の内に潜んでいた形の無いものが次第に浮かび上がり、やがて調和したハーモニーに到達した時に、その言葉 („irreprehensibilis“) が輪郭を表す。全体を通じて穏やかな流れの中に立体的な奥行きと、響きの清潔感が感じられる。1869年の作品。

## „Ave Maria“

アヴェ マリア (7声による合唱)

Andante



A - ve Ma - ri - a, gra - ti - a ple - na

*Ave Maria, gratia plena,*  
幸あれマリアさま 恵みに満ちたかたよ  
*Dominus tecum.*  
主はあなたとともに(おられます)  
*Benedicta tu in mulieribus,*  
あなたは女の中で祝福されたかた  
*et benedictus fructus ventris tui, Jesus.*  
胎内の果実であるイエス様も祝福されています  
*Sancta Maria, Mater Dei,*  
聖なるマリアさま、神の御母  
*ora pro nobis peccatoribus*  
われら罪人のためにお祈り下さい  
*nunc et in hora mortis nostrae.*  
今も、われらの死の時も

*Amen.*  
アーメン

Bruckner の合唱作品はハーモニーに特徴があり、彼のハーモニーに対する繊細な感覚や、その音色の効果的な使用に目を見張るものがある。この曲では、女声と男声の音質の違いで Maria のイメージを描いて行く。冒頭は女声合唱のみで、へ長調の3和声の基本形を微細に変化させながら進む。音色は明るく、まさに恩恵 („gratia“) と祝福 („Benedicta“) に満ちたハーモニーである。男声合唱に移ったところは、Maria がキリストを受胎したという神秘性を響きで表している。„Jesus“ の響きは、一度目は男声の深いまろやか響きで、二度目はテノールとアルトの音色によりだんだん輪郭がはっきりしてくる。そして遂に三回目で全員が歌い、まばゆい光に包まれたイエスが出現する。1861年の作品。